

氏 名 PRADHAN GOURANGA CHARAN

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2055 号

学位授与の日付 平成 31年 3 月 22日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 19 世紀末・20 世紀初頭の英米における『方丈記』の受容
—夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—

論文審査委員 主 査 教授 ブリーン ジョン
教授 稲賀 繁美
教授 荒木 浩
特任教授 下西 善三郎 上越教育大学
准教授 河野 至恩 上智大学 国際教養学部

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 プラダン ゴウランガ チャラン
PRADHAN GOURANGA CHARAN

論文題目 19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容—夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—

本研究は、日本の古典名作『方丈記』が19世紀後半においていかに海外に伝播し、20世紀初頭までに英米を中心とした西洋でどのように受容されたのかを解き明かす試みである。

『方丈記』は成立してから現在に至るまで様々な観点から受容され、連綿と関心が注がれてきた。また、本作品やその作者である鴨長明に関しても数多くの研究がなされてきた。これらの先行研究の多くは、もっぱら国内におけるその受容とそれに関わる諸問題について論じたものである。ところが、この作品は明治中期という早い時期に外国人からも注目を集めており、海外でも受容されてきた。実は『方丈記』は19世紀末・20世紀初頭に西洋で読まれた数少ない日本文学作品の一つであり、19世紀末頃には既に世界文学の一部に組み込まれていた。にもかかわらず、このような観点から『方丈記』を捉えた研究はこれまでさほど行われてこなかった。本研究は、『方丈記』を世界文学の一部として捉え直し、本作品がいかに海外で受容され、どのように読まれたのかを明らかにすることを目指している。

『方丈記』が世界で流通する過程には、文豪夏目漱石が大きく関わっている。漱石は東京帝大在学中に、英文学科の教授であったディクソン (James Main Dixon) の依頼で本作品の最初の外国語訳である英訳に携わった。ディクソンは、漱石の英訳を下敷きにして長明と英国の詩人であるワーズワースを対比した論文を執筆し、『方丈記』の英訳とともに日本アジア協会の会報に掲載した。これによって初めてこの作品は海外の読者の手に届いたのである。したがって、漱石とディクソンが示した『方丈記』に対する理解は、海外における本作品の受容を検討する上で重要な意味をもつと考えられる。そのため、本研究は漱石の「英訳方丈記」に主眼をおき、19世紀末・20世紀初頭の英米における本作品の流通の様相を追求し、その受容の諸側面を明らかにすることを目指す。

第1章では、鴨長明の生涯と『方丈記』の成立に関する概要を提示し、本作品が中世期から江戸時代を経て明治中期までにどのように読まれてきたのか、その受容の特色を確認した。『方丈記』に言及した中世期の文学作品が、本作品ないし長明をいかに捉えたのかを考察した上で、江戸時代に成立したその注釈書などを取り上げ、それぞれの『方丈記』受容の様相を考察した。そして、外国人が本作品に関心を寄せた明治中期

に至るまでに『方丈記』がどのように受容されてきたのか、その特徴を提示した。

第2章では、西洋人として『方丈記』に初めて強く関心を持ち、漱石にその英訳を依頼したディクソンについて検討を加えた。特に、先行研究ではディクソンの来日以前の経歴や国内外における学問的な業績について不明な部分が多かったため、この点を中心に考察した。まず来日以前のディクソンの伝記を整理し、日本国内における彼の業績を明らかにした。12年以上にわたる在日期间において、彼が日本の英語教育の担い手になった次世代の学者をいかに育成し、英語教育用の教材作成に力を注いだのかを確認した。同時に、彼が日本の女子教育の発展にも深く関わっていたことを明らかにした。なお、渡米後のディクソンはアメリカの大学で日本に関する研究の発展のためにも尽力した。晩年のディクソンは20年以上にわたって南カリフォルニア大学に勤務し、彼の指導によって東洋学部が新設され、この大学はアメリカ西海岸の日本学の一つの拠点となった。本章の末尾では、このような渡米後のディクソンの活動と、日本学に対する彼の功績についても言及している。

第3章では、漱石が『方丈記』英訳と同時に執筆したエッセイを中心に考察を行っている。漱石の英訳を対象にした従来の先行研究では、漱石と『方丈記』の関係や原文と訳文の比較検討を中心に行われてきたが、『方丈記』の受容という観点からの考察やディクソンが漱石の『方丈記』理解にいかに関与を与えたのかについて注目した研究は管見の限り見られない。そこで本章では、ディクソンが漱石にどのように翻訳を依頼したのか、その過程を跡付けるとともに、漱石の英訳とエッセイの解析を通じて漱石の『方丈記』理解の特徴を明らかにした。漱石は『方丈記』の従来の解釈を踏襲せず、本作品をイギリスのロマン主義的な自然作品に近いものとして解釈し、鴨長明を英国の詩人ワーズワースと比較している。漱石によるこのような解釈の背景には、大きな要因としてディクソンの存在があったとみられる。なお、漱石の英訳本文の分析を通じて、これまであまり注目されてこなかった漱石の翻訳思想についても検討を加えた。

第4章では、漱石とディクソンが執筆したエッセイと論文及びそれぞれの英訳の内容を分析し、両者の『方丈記』理解の差を明らかにするとともに、ディクソンが漱石の『方丈記』解釈をいかに受け入れたのかを考察した。その結果、ディクソンは自身の論点に適した内容を漱石のエッセイから取り入れ、英訳に関してはほぼそのまま漱石の訳文を再利用したことが確認できた。ディクソンは漱石の論考を継承して、長明を英国の詩人ワーズワースと具体的に比較検討し、前者の自然観が後者よりはるかに劣ったものであると主張した。さらに、ディクソンが日本アジア協会でこの論文を発表すると、西洋人の聴衆は、長明を西洋の文化的な枠組みを通して理解しようとし、批判の対象にしたのである。

第5章では、19世紀末・20世紀初頭の英米を中心としたこの作品の流通及び受容について考察を行った。まずは、1896年にアメリカで刊行されたロジャー・リオーダン・

高柳陶造の共著 *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan* に見られる『方丈記』の描写を分析し、作者の『方丈記』理解を明らかにした。また、本書の作者がディクソンの『方丈記』英訳をいかに継承し、鴨長明をアメリカの自然崇拜者であるソローに譬えた本書の見方に、ディクソンの『方丈記』論がどのような影響を与えているのかを考察した。次に、日本学者アストン著『日本文学史』(1899)に収められた『方丈記』英訳を取り上げ、彼が英訳に利用した底本を明らかにした上で、彼の『方丈記』理解について検討した。続いて、南方熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳(1905)に焦点を当て、ディキンズの翻訳依頼の詳細を調査するとともに、熊楠が英訳に使用した底本について考察した。なお、この英訳の題目では長明が「12世紀の日本のソロー」と紹介されている。先行研究ではこの題目は熊楠が付けたものであると指摘されてきたが、実際にはディキンズによって付されたものである。本論ではこのことを明らかにし、さらにこの題目がいかに漱石の『方丈記』論から影響を受けたのか考察した。次に、1912年にイギリスで刊行された著書 *Myths and Legends of Japan* に収録された『方丈記』の描写を取り上げた。著者のデイヴィスはなぜ長明を「真の自然崇拜者」として捉えたのだろうか。ここでは20世紀初頭のイギリスの時代背景に鑑みつつ、デイヴィスの『方丈記』解釈の内実に迫った。最後に、1933年にイギリスの詩人バンディングが書いた“Chomei at Toyama”という英詩を検討対象にし、彼がなぜ散文であった『方丈記』を英詩に書き換えたのかを検討した。そのような検討作業を通して、この詩がエズラ・パウンドや W.B.イェイツなどモダニズム運動の指導者の影響下で形成されたことを明らかにし、作者の『方丈記』理解の特徴を明らかにした。

以上の考察から19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容は、夏目漱石が提唱した『方丈記』論により大きく影響を受け、本論で取り上げた『方丈記』の読者は、それぞれが置かれた状況に左右されながら、漱石の『方丈記』理解を継承したことを結論付けた。

Results of the doctoral thesis screening

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名 PRADHAN GOURANGA CHARAN

Title
論文題目 19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容
—夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—

本論文「19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容 —夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—」は、中世文学の精華である『方丈記』の受容史を追跡する斬新で刺激的なものである。夏目漱石の「英訳方丈記」を重要なエポックと位置づけ、とりわけ『方丈記』の海外における受容史を分析し、その国際的な文学史的・文化史的意義を意欲的に考究する。本論文は、全5章と序論と終章から構成され、また附録としてジェームス・メイン・ディクソン (James Main Dixon) に関する新資料の影印を付している。

まず序論で、先行研究の詳細な分析を行い、論文全体の概要を紹介し、ベンヤミン(Walter Benjamin)の翻訳論、同論を引くヴェヌティ(Lawrence Venuti)の翻訳論、トゥーリ(Gideon Toury)の「翻訳規範」概念も援用して、本研究の学際的方法論を解説する。

鴨長明『方丈記』は、13世紀の擱筆以来早くより多様に受容されたが、江戸時代を迎えて学問的対象となり、広い読者を得た。第1章「『方丈記』の受容について—その成立から明治期まで—」では、『方丈記』の成立後から中世・近世にかけての注釈書の刊行、さらに明治以降から昭和にいたる『方丈記』理解と享受の様相を考察し、読者層によって多岐にわたる方法で読まれたことを示す。このような受容史は中心的研究対象である夏目漱石「英訳方丈記」理解の前提となる。

漱石は、東京帝国大学在学中、英語・英文学教員ディクソンの依頼を受けて『方丈記』を英訳する。『方丈記』初の外国語訳である。本論文第2章「ジェームス・メイン・ディクソンをめぐって」では、ディクソンについて、豊富な新資料を発掘し、漱石との関係に新たな光を当てる。また、東大退職後のディクソンが米国で日本学の一拠点を設立した事情を解明している。申請者はディクソンがチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) 著『日本事物誌』の記述で『方丈記』と初めて出会い、さらにディクソンが東大の授業中、ワーズワース (William Wordsworth) などの自然観を論じる中で鴨長明との比較に関心を抱いたとの仮説を提示する。

第3章「夏目漱石の『方丈記』論—その特徴と形成について—」で英語圏における『方丈記』の受容研究がこれまで不在であったことを示し、漱石の『方丈記』英訳と解釈について独自の分析を進める。英訳の内実、また漱石が英訳に付して書いたエッセイ (A Short Essay on It) を再検討する。申請者は、漱石が英訳とエッセイの重点を、五大災厄などの災害にではなく、英詩人のワーズワースが表現する自然観との比較の中に捉え、『方丈記』を自然文学作品として位置付けたことを論じる。この位置付けは、仏教観、災害論、長明の隠遁生活に分類される『方丈記』享受論の中で極めて異質であり、そこに、

ディクソンの〈期待の地平〉との関わりを議論する。申請者はさらにエッセイにみる翻訳論を分析し、それが漱石の晩年の翻訳論に繋がる事実を明らかにする。

第4章「漱石とディクソンの『方丈記』英訳の比較検討」は、従来注目されなかったディクソンと『方丈記』との関係を軸に展開する。申請者はディクソンによる『方丈記』英訳と付属論文を原資料に当たり解析し、これまで研究対象として軽視されてきた漱石のエッセイと比較検討をする。緻密な文言の逐語的な分析によってディクソンの『方丈記』論と英訳は、いずれも漱石のエッセイと英訳から強い影響を受けて完成されたことを論証する。とりわけ夏目漱石が見出した、鴨長明の人間嫌い (misanthropy) というユニークな観点への着眼が重要である。申請者は漱石を native informant のように利用したディクソンの仕事の全体像を描き出していく。さらにディクソンが日本アジア協会で行った講演と『方丈記』翻訳の朗読を重視して、それを聴講したノックス (George William Knox) やタイソン (Alexander Tison) の長明像を視野に入れ、彼らが、エマーソン (Ralph Waldo Emerson) やルソー (Jean-Jacques Rousseau) との共通点を見出したことを立証する。こうして1890年代日本に滞在していた西洋人が日本人の自然観をいかに捉えたかについての新資料による究明は特筆に値する。

第5章「漱石・ディクソン以後における『方丈記』の受容—19世紀末・20世紀の初頭を中心に」では、漱石・ディクソン以降の『方丈記』受容を追跡する。これまで知らなかった漱石・ディクソン訳の及ぼした影響力を究明し、『方丈記』が世界文学として開花していく過程が緻密に分析される。

とりわけ高柳陶造他が『サンライズ・ストーリーズ』(Sunrise Stories)に描いた鴨長明『方丈記』の章を申請者が発掘し、解析したことは特筆すべきである。申請者は、同章が『方丈記』とソロー (Henry David Thoreau) との比較論を展開している、という注目すべき事実を解明し、また漱石の英訳から11年後に出現したディキンズ (F. Victor Dickins) ・南方熊楠共訳『方丈記』に注目し、ディキンズが改稿した際にディクソン訳の他にアストン (William George Aston) による英訳を参照していることを明らかにする。ディキンズが『方丈記』訳の副題に「12世紀の日本のソロー」(A Japanese Thoreau of the Twelfth Century) と付したことに申請者は着目する。従来『方丈記』にソローとの比較を展開したのは熊楠だとされていたが、申請者は漱石・ディクソン訳から触発された高柳等によってもたらされたことを見事に示す。こうした一連の立証は、漱石訳の潜在的影響力をめぐる重要な発見である。

終章では漱石の展開した「時代思潮論」を分析し、それが現在でいう「受容理論」に類似することを解き明かし、その先駆性を指摘する。さらにこれまでの議論をまとめ、『方丈記』が近代西洋社会へと受容され、世界文学として認識される過程を示す。今後の研究展望として、『方丈記』のフランス語・ドイツ語訳などを含む、「20世紀の初頭」という時代制限を超えた総合的な受容論を試みる必要性を語る。

本論文に問題点が残されていないわけではない。大きな視点からは、翻訳可能性の問題、隠遁比較文化論などについてさらなる探求が望まれる。漱石のエッセイについてもより多角的な解釈もありうるだろう。論文の表現や論証のあり方に改善すべき点も残る。申請者自身もこうした点を自覚しており、今後新資料の探索や研究視野の拡大によって、これらの課題も克服できるだろう。

結論的には、これまでの研究史とは異なった視点と資料解析から、国内海外における『方丈記』の受容を多角的に究明し、世界文学としての『方丈記』の可能性を初めて論ずる本論文については、審査委員会は、全員一致で博士の学位に相当するものと判定した。

(備考)

1. 用紙の大きさは、日本工業規格 (JIS) A 4 縦型とする。
2. 1 行あたり 40 文字 (英文の場合は 80 文字)、1 ページ当たり 40 行で作成する。
3. 上マージン, 下マージン, 右マージンは 2 cm, 左マージンは 2.5 cm とする。
4. タイトルと本文の間は、1 行空ける。
5. ページ番号は入れない。
6. 出願者 (申請者) が論文審査に合格し、博士号が授与された場合は、本紙を総合研究大学院大学リポジトリにおいて、インターネット公開する。

Note:

1. The sheets must be Japanese Industrial Standard (JIS) A4 vertical.
2. Each line shall have approximately 40 characters in Japanese or 80 characters in English, and each page shall have 40 lines.
3. The top, bottom, and right margins must be 2 cm and the left one must be 2.5 cm.
4. Single spacing is required between the title and the text.
5. There must be no page numbers.
6. If the applicant is conferred a doctoral degree, this paper will be published on the SOKENDAI Repository.